Q 当時16才のマララさんは国連総会で何を訴えているのでしょうか？

世界を変える若者のチカラ

国際NGO
プラン・インターナショナルの
活動現場から

プランは世界70カ国以上で活動する国際NGO。
国連に公認・登録されている民間の団体です。

- プランの誕生は1937年。スペイン内戦下の孤児救済のために、イギリス人ジャーナリストが始めた活動。いまは途上国51カ国の地域開発支援へ
- プランの目標は、「子どもの権利が守られ、女の子が差別されない公正な社会を実現する」ことです
- 活動地域では、子どもを含めた住民たちが、主体的にかかわりながら、地域開発プロジェクトを行います
- プロジェクトは、教育、保健、水と衛生、生計など多岐の分野にわたります
- 日本では6万人の支援者と650人以上のボランティアに支えられています
- 学校との連携も進めています。2016年度は、73校の学校、PTA、団体計9,600人以上に途上国問題などをテーマに授業を行いました。教材など資料の提供も行っています

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン　プラン・インターナショナル　検索
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10-11F
TEL：03-5481-0030　FAX：03-5481-6200　E-mail：education@plan-international.jp

2016.9

Q：マララさんが訴えていることは何でしょうか？

A：それはすべての子どもが、男の子であっても女の子であっても、教育を受けられる権利

マララさんのストーリー

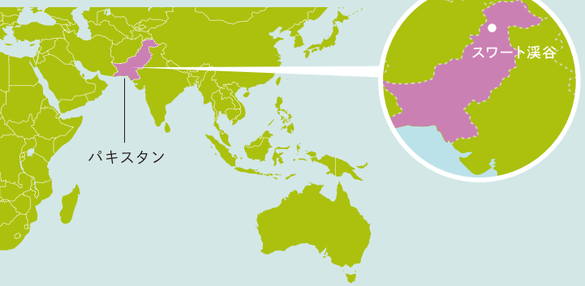
マララ・ユスフザイさんは1997年7月12日生まれのパキスタンの女の子です。11才の時に、タリバンの武装勢力の支配下にあったスワート渓谷で恐怖におびえながら生きる人々の惨状を英ＢＢＣ放送のブログに投稿し、武装勢力による女子校の破壊活動を告発。女の子にも教育が必要だと訴えました。当初は匿名でしたが、その後パキスタン政府の支援も得て、実名で活動するようになり、女子教育に反発する武装勢力の攻撃対象になってしまいました。

2012年10月9日、スクールバスで帰宅途中のマララさんを武装勢力が襲撃し、マララさんは頭を銃で撃たれ重傷を負いました。イギリスの病院に運ばれて手術を受けたマララさんには、世界各国から祈りと多くの応援のメッセージが寄せられました。その後、彼女は奇跡的に回復し、退院後も家族とともにイギリスのバーミンガムで暮らし、学校に通っています。

その後、マララさんは、16歳の誕生日である2013年の7月12日、ニューヨークの国連本部で力強い演説をしました。そこには世界80カ国以上から約600人の若者たちも参加しました。

「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です」。

マララさんの活動は世界中で評価され、2013年アムネスティ・インターナショナルによる「良心の大使賞」、欧州議会による「サハロフ賞」を受賞、2014年には最年少でノーベル平和賞を受賞しました。彼女は、自伝をはじめとする執筆活動やシリア難民への教育支援活動など、その後も精力的に活動を進めています。



ノーベル平和賞授賞式祝賀会でスピーチするマララさん
受賞スピーチでは「なぜ戦車をつくることは簡単で、学校を建てることは難しいのか」と訴えた。

©Plan International / Erik Thallaug 2014年

マララさんの国連本部でのスピーチ（抜粋）2013年7月12日マララ・デー

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、今こそ声を上げる時です。
私たちはきょう、世界の指導者たちに、その戦略的な政策を平和と繁栄のために支えるよう呼びかけます。

私たちは世界の指導者たちに、どのような和平協定も女性と子どもの権利を守るものとせねばならないと訴えます。
女性の権利に反する取決めを受け入れることはできないからです。

私たちはすべての政府に対し、全世界であらゆる子どもに無償の義務教育を与えるよう呼びかけます。
私たちはすべての政府に対し、テロや暴力と闘い、残虐行為や危害から子どもたちを守るよう呼びかけます。
私たちは先進国に対し、開発途上地域の女児の教育機会拡大を支援するよう呼びかけます。

私たちはすべてのコミュニティに対し、寛容の心でカースト、信条、宗派、人種、宗教、ジェンダーによる偏見を拒絶するよう呼びかけます。それはまた、女性の自由と平等を確保し、豊かな暮らしを送れるようにすることでもあります。半数の人間が抑圧されている世の中が、うまく行くはずなどないからです。

私たちは全世界の姉妹の皆さんに対し、勇気を持って自分の強さを認め、その能力を最大限に発揮するよう呼びかけます。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、私たちはあらゆる子どもの輝ける未来のために、学校と教育を求めます。
私たちは平和と教育を目指す旅を続けてゆきます。誰も私たちを止めることはできません。
私たちは自らの権利を求めて声を上げ、その声を通じて変化をもたらします。
私たちは言葉の力と強さを信じています。私たちの言葉で世界を変えることができます。
私たちはともに、団結して教育を求めているからです。その目的を達成するために、知識という武器を装備し、連帯と団結という盾で身を守ってゆこうではありませんか。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、何百万もの人が貧困、不正、無知に苦しんでいることを忘れてはなりません。
何百万もの子どもたちが学校に通えていない現実を忘れてはなりません。
私たちの兄弟姉妹が、明るく平和な未来を待ち望んでいることを忘れてはならないのです。

ですから、本とペンを手に取り、全世界の無学、貧困、テロに立ち向かいましょう。
それこそ私たちにとって最も強力な武器だからです。

一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変えられるのです。
教育以外に解決策はありません。教育こそ最優先です。

出典：国際連合広報センター　http://www.unic.or.jp/texts_audiovisual/audio_visual/videos/women/

©CPlan/Gina Nemirofsky

©Plan/Alexandra Kensland Letelier

国連事務総長から表彰されるマララさん

マララさんの国連スピーチを聞くユースたち

日本語字幕付きの動画

●国連本部でのスピーチ（約18分）
https://youtu.be/aGqcWmCJ8gM

●マララさんと「もう一人のマララたち」の声（約3分半）
https://youtu.be/xVUyGS6qqlw

「わたしはマララ　教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女」
マララ・ユスフザイほか著
金原瑞人・西田佳子訳　（学研）

「武器より一冊の本をください　少女マララ・ユスフザイの祈り」
ヴィヴィアナ・マッツァ著
横山千里訳　（金の星社）

表紙写真 ©Plan International/Alexandra Kensland Letelier

なぜ女の子は学校を中途退学しなくてはならないの？

途上国の人々、政府や国際社会の努力で、小学校の就学率は男女ともに大きく改善しています。
しかし、今も6,200万人の女の子が小・中学校を卒業することができません。（＊1）

女の子が学校に行けない7つの理由

1 貧困

途上国でも、公立の小学校は学費が無料のところが増えています（＊2）。それでも制服や教科書などは、貧しい家庭にとっては負担です。親は将来の稼ぎ手として男の子を優先し、女の子は学校に通わせてもらえないことが一般的です。

2 “女の子に教育は必要ない”という周囲の偏見

「女の子は将来、他家に嫁いで家事や育児をするだけだから、教育は必要ない」「教育を受けさせても見返りがない」。地域や家族のこのような思い込みや偏見が、女の子を学校から遠ざけています。

3 家事労働の負担

家事手伝いやきょうだいの世話などは、女の子の仕事とされています。家事手伝いによって疲労がたまり学業についていけなくなったり、宿題をする時間がなかったりして、中途退学してしまう女の子も大勢います。

4 早すぎる結婚・妊娠

「娘はなるべく早く嫁がせた方がよい」という親の考えや、嫁ぎ先からの結婚結納金を目当てにしたりすることで、10代前半の女の子が強制的に結婚させられる慣習があります。結婚・妊娠によって、女の子は学業を続けられなくなります。

5 学校が遠い

学校が近くにないことで、親が通学を許さないことがあります。通学路には思春期の女の子にとって多くの危険（女の子が学校に行くことを快く思わない人からの嫌がらせや性暴力など）が潜んでいるためです。

6 学校が安心できる場所ではない

「女の子は教育を受ける必要はない」という偏見からの差別や嫌がらせ、ときには性的暴力に遭遇してしまうこともあります。また、学校に女子トイレがないなど、設備に女子生徒への配慮が欠けていることも、女の子を学校から遠ざけています。

7 女性の先生がいない

女の子の心身を理解する女の先生が少ないことは、初潮を迎えた女の子の通学に影響します。また、女性の先生が身近にいないことで、女の子はロールモデル（お手本となる人）に出会えず、学校で学んでも将来の展望が描けないことにもつながります。

＊1：UNESCO GMR, 2015
＊2：1 Goal Education for All （Global Campaign for Education 2010）

シータさんの物語

ネパールのシータさん（12才）は、両親、2人の弟と妹の6人家族です。シータさんは家の手伝いをよくします。朝早くから、そうじ、水くみ、やぎの世話、家族の朝ごはんの仕度などです。朝食はまず、お父さんと弟たちが食べ、次にお母さんやシータさんと妹が食べます。この地域では女の子より男の子の方が優遇されるからです。

5才から水くみはシータさんの仕事。毎日、朝と夕方、30分かけて井戸まで水くみに行きます。シータさんは、家の仕事やきょうだいの世話のために、小学校3年で学校を中途退学してしまいました。本当はもう一度学校に行きたいと思いますが、貧しく、家の手伝いは女の子である自分がしなくてはならないと考え、あきらめています。弟が友だちと元気に遊ぶことも、うれしいけれど、自分も遊んだり、自由に過ごしたりする時間が欲しいと思うこともあります。

お父さんは、家の近くに中学校がなく、小学校までしかいくことができなかったので、良い給料をもらえる仕事につけませんでした。また、お母さんは学校に行ったことがないので、女の子が学校に行くことの大切さがわかりません。友だちのお母さんも、読み書きができない人は多くいます。

お母さんがお父さんと結婚したのは13才。お父さんはシータさんの結婚相手を探しはじめました。「勉強したり、遊んだりする時間はこの先ないのかな？」「お母さんのように貧しい暮らしの中で、家の仕事と子育てにおわれて過ごすのが女の子にとってはあたり前なのかな？」とシータさんは思っています。

水汲みをするシータさん（左）

「女の子の将来」

こんな状況があると・・	どんなことが起こる？	その影響は？
（例）学校に行くことができない	（例）読み書きや計算を習うことができない	（例）自分のもつ権利を知らない、よい仕事につけない、子どもを健康に育てられない
10代前半で強制的に早すぎる結婚をさせられる		
負担の重い家事労働のすべてを一人でやらなくてはならない		

※日本ユニセフ協会「地球のともだち」を参考に作成

女の子への教育が、世界を変える

1989年に国連で採択された子どもの権利条約は、子どもの基本的人権を国際的に保障するために定められた条約です。「生きる権利」「守られる権利」「育つ権利」「参加する権利」のために必要となる具体的な事項を定めています。

「女の子だから」という理由で「人間らしく生きる当たり前の権利」を奪われてはなりません。女の子も、男の子同様に教育を受ける権利があります。そして教育を受けることで、その後の女の子自身の人生、そして家族・地域社会へ幸せをもたらす大きな可能性が生まれます。また母親が教育を受けていると、次世代にも良い影響を与えるというデータもあります。

女の子への教育は、公正な社会づくりに欠かせない、そして世界の貧困問題の解決の鍵となります。

40%
女の子が初等教育を5年間受けると、将来産む子どもが5才まで生き延びる確率が40％以上も上がる（＊1）

22%
ケニアでは、女性が男性と同じレベルの教育を受け、農作業にも決定権を持った場合、収穫高が22％アップ（＊2）

1/5
ジンバブエでは、学校に通う15〜18才の女の子はHIVに感染する率が5分の1（＊3）

10兆円
65の途上国や東欧諸国の多くの女の子が中等教育を受けられないことによる経済的な損失の試算は、年間10兆円（＊4）

＊1 THE WORLD BANK, “Girls’ education in the 21st Century: Gender Equality, Empowerment, and Economic Growth(2009)
＊2 State of World Population 2005,UNFPA　＊3 Global Coalition on Woman and AIDS
＊4 Plan International、Paying the Price: The economic cost of failing to educate grils(2008)

女の子への差別をなくし、より良い社会をつくるために、国際社会が定めた条約には、どのような約束事が書かれているか、調べてみよう。

- 子どもの権利条約
- 国際連合憲章
- 世界人権宣言
- 女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約（CEDAW）
- 第4回世界女性会議「北京宣言」・「北京行動綱領」
- 持続可能な開発目標（SDGs）

ファトマタさんの物語

西アフリカのシエラレオネに住むファトマタさんは17才。お母さんは14才の頃、年取った男性と結婚をさせられ、その後若くして未亡人となり、シングルマザーとして子どもたちを育てました。お母さんは、娘には何としても教育を受けさせたいと考え、ファトマタさんを学校に通わせました。彼女は一生懸命勉強し、知識を身につけ、関心を広げています。

ファトマタさんは現在「早すぎる結婚」という地域に根づく悪習を廃止させるために積極的に活動しています。「私はシエラレオネの女の子が、いつ誰と結婚するかを自分自身で決められる権利を勝ち取るために活動を続けます」。ファトマタさんはニューヨークの国連本部で開催された、第56回国連女性の地位委員会で、政策決定者たちを前に演説をしました。

彼女は農村地域で、村人たちに「早すぎる結婚」の問題をわかりやすく伝えるために路上劇も行っています。将来会計士になるために勉強しながら、ラジオでのトーク、物語や歌、ポスターやチラシを通しても「早すぎる結婚」の問題について人々に伝え、その廃止を訴えています。

国連女性の地位委員会で演説をするファトマタさん

途上国の女の子の現状についてもっと知りたい人は
プランWEBサイト / ライブラリー　www.plan-international.jp

日本においては、男女平等はどうなっているだろう。

「グローバル・ジェンダー・ギャップ指数」では、日本の成績は145カ国中101位（2015年）。
なぜこのように下位になっているのか、そして日本政府の取り組みについて調べてみよう。

世界経済フォーラム　グローバル・ジェンダー・ギャップ報告書
内閣府　男女共同参画局ホームページ
http://www.gender.go.jp/

問題解決のためのアクション
～3本の柱～

一人ひとりの意識とふるまいを変える

「女の子にお金をかけることは隣の畑に水をあげるようなもの」「女の子は、学校に行くより、家事やきょうだいの世話をするべき」・・・このような差別や偏見、不平等な力関係を変換させるためには、人々の意識啓発が欠かせません。現地では当事者である女の子・女性が、男性を巻き込みながら、啓発活動の重要な担い手として活躍しています。すべての子どもに平等な世界をつくるためには、日本においても、構造的な男女不平等の原因を知り、改善に向けて何ができるかをともに考えることが重要です。

女子教育の大切さを訴え行進するネパールの女の子たち

通学するシエラレオネの女の子

地域社会を変える

途上国における貧困の問題は根が深く、さまざまな要因が絡み合っています。「女の子が学校に行けない」という問題に対しても、学校を作れば解決するということではありません。例えば、男女別のトイレがないことが思春期の女の子が学校に行けない理由になっていることもあります。トイレ建設は一見すると保健改善のための取り組みですが、教育改善にもつながります。「教育」「保健」「水と衛生」「家計の安定」などの様々な分野におけるプロジェクトを統合的に実施することで、問題の根本的な改善をはかり、地域社会を変えていくことが必要です。

社会の仕組みを変える（アドボカシー）

問題解決のためには、国内外の政策の改善が不可欠です。政策を変えるためには、その問題が起こっている根本的な原因を理解し、それを解決するための提案を、政策を決定する責任のある政治家や政府の担当者に届けることが重要です。活動現場の経験や知見、当事者である女の子や女性の声を政策に届けるために、行政担当者と対話をはかり、法律の策定・改善支援、教育政策やカリキュラムづくり支援、関係機関の連携をはかります。日本でも、「世界中の子どもに教育を」「ＯＤＡにおける教育支援の充実を」などを訴える署名やアクションが呼びかけられています。

国連でスピーチをするパキスタンの女の子

プランの「女の子の教育支援」プロジェクト

活動地域の女の子たち

パキスタンの女子教育プロジェクト

実施地域の現状は？

約1億8000万人のうち、約4人に1人が国際貧困ライン（1日1.25ドル＝約130円未満）以下の生活を送るパキスタン。このプロジェクトの実施地域は北部ギルギット・バルティスタン州ディアメール郡です。

乾燥した山岳地帯で、パキスタンの中でも最も開発が遅れた偏狭な地域です。部族文化と男性の宗教指導者の影響が強い父権社会で、識字率は男性が30％、女性はわずか2％。女の子が教育を受けている率は20％です。非公式のイスラム女子学校が唯一の女子教育の場になっていて、主にコーランを教えています。パキスタンの公用語であるウルドゥー語の読み書きや算数などの基礎科目の勉強ができないなど、女の子が社会的に差別を受け、教育を受けられないことが大きな問題になっています。

学校をつくるだけではダメなんだね

Point!

どんな成果をめざしているの？

女の子たちが将来、地域の改善に貢献する力をつけることを目指しているんだね

Point!

・最低1000人の女の子が適切な学習環境で学び、公教育を修了すること
・女の子が、その後中学校に進学し、将来は地域全体の女性の教育改善に貢献する力をつけること
・活動地域の社会的背景に配慮しながら、地域の担当者・保護者の意識改革を推進すること

誰が対象？

10のイスラム女子学校で学ぶ5歳～10歳の女の子1000人を対象にプロジェクトを実施しています。

社会的背景や文化に配慮しながら進めることが大切

Point!

宗教指導者など男性の関係者を活動に巻き込むことが成功のカギ！

Point!

どんな活動？

・イスラム女子学校（10校）でウルドゥー語、算数などを教える
・女性教師30人の採用とトレーニング
・教科書や机などの備品の支給、教室やトイレの改修
・教師や宗教指導者などの能力強化

＊プランの女の子支援プロジェクトは年度毎に変わります。
書き損じハガキやご寄附で支援に参加することができます。

学校とプランの連携

玉川聖学院高等部の皆さん

「世界をつなげる国際教育」に取り組む中で、プランの事務局訪問、職員による授業、イベントへの参加などを通し、世界への理解を深めています。生徒会を中心に全校へ呼びかけ、ベトナムの学校スポンサーとして支援活動にも取り組んでいます。ベトナムの子どもたちとの交流から、世界を身近に感じ、自分たちの生活にどう活かしていくかを考えています。

生徒会役員が中心となり、全校で途上国支援に取り組む

お茶の水女子大学附属高等学校の皆さん

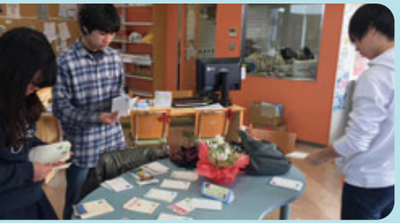
スーパーグローバルハイスクール（SGH）として、「女性の力をもっと世界に！」を目標に国際社会の平和と持続可能な発展に寄与する人材育成に取り組んでいます。課題研究の一つに「国際協力とジェンダー」を設置。プランのBecause I am a Girl キャンペーンや読書感想文コンクールを“考える場”として、積極的に探求活動に組み入れて学習を進めています。

ネパールのユースとジェンダーや
児童労働について意見交換する

宮城学院中学校高等学校の皆さん

グローバル・スタディーズでは、世界の最先端の情報に触れる中で、グローバルな感覚を身につけ、世界に目を向けた人材の育成を目指しています。プランの職員による講演、映画『Girl　Rising』自主上映会、読書感想文コンクールへの参加などを通して、女性の権利向上や途上国の抱える問題について、学びを深めています。

国際ガールズ・デー制定の背景から、
世界の女の子の問題を考える



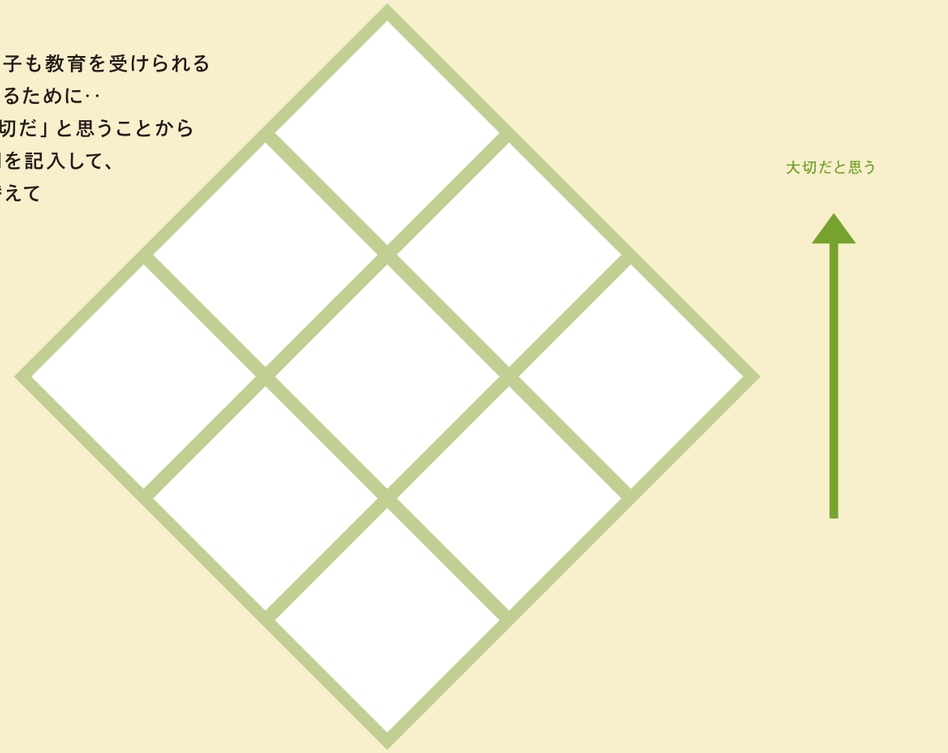
書き損じハガキの仕分け作業に取り組む

明治学院大学の皆さん

ボランティアセンターを中心にプランの事務局でのボランティア・プログラム、国際ガールズ・デーイベントの協働などを行っています。プランの「書き損じはがき・未使用はがきキャンペーン」にも参加。大学生ならではの行動力で、途上国支援に取り組んでいます。

「私が大切だと思う事」

女の子も男の子も教育を受けられる
世界を実現するために‥
あなたが「大切だ」と思うことから
◇の中にA〜Iを記入して、
順番に並び替えて
みましょう。



A．教育の大切さや途上国の暮らしについてもっと調べてみる
B．関連する本を読む
C．国際交流の活動を推進し、外国人と友達になる
D．文化祭や学園祭を通じて、多くの人に教育の大切さを発表する
E．友だちや家族に知ったこと・学んだことを伝える
F．お金や書き損じハガキなどを集めて教育に関わるNGOなどに寄付をする
G．NGOのスタディツアーに参加する
H．新聞に自分の意見を投稿する
I．世界中の子どもが学校に通えるように日本の政治家に働きかける